2. 学際的・国際的な学びを育てる教育環境

1）学部学生の国際化への支援

(1) イタリア短期派遣研究

令和 5 年度イタリア短期研修は、2023 年 9 月 17 日～9 月 26 日（9 日間）の日程で実施され、看護学部教員 1 名が引率した。参加者は、看護学部から 2 名（1 回生、2 回生各 1 名）、文化学部 3 名、社会福祉学部 1 名の計 6 名であった。派遣先機関はヴェネツィア・カ・フォスカリ大学で、期間中全日程の研修をヴェネツィア本島および周辺地域で実施した。

① 研修実施体制

本研修は 2019 年の実施を最後に新型コロナウイルス感染症の世界的流行に伴い中断されていたが、流行の収束により再開されたものである。中断されていた間に、それまで永く本研修の受入れに中心的な役割を担っていただいていた日本語学科のルペルティ教授が急逝されたが、2020 年同大学に、日本人としてはじめて専任教員として着任された内海博文准教授（社会学）が、受入れ担当をお引き受け下さったことから実現した。内海先生には事前に、大学で聴講（参加）可能な授業の時間割の提供をいただき、参加者の希望と先方の先生方とのご都合との調整をいただいた結果、国際交流研修としての目的に沿った充実した内容となった。

② 主な研修内容

平日は事前に調整した時間割に沿って、研修生が大学の日本語授業（主に「自由会話」）に参加し、与えられたテーマについてグループで自然な日本語会話を楽しむ、というもので、研修生はネイティブスピーカーとして現代日本語を示すとともに、イタリア人学生との異文化交流をはかった。また、別の授業では、あらかじめ用意した内容で、日本（または高知）の文化を紹介のプレゼンテーションを実施し、好評を博した。紹介したのは「よさこい」「妖怪・カッパに関するマンガ作品の披露」「カッパの折り紙の実演」である。

妖怪・カッパの折り紙を実演する研修生（看護学部）

「自由会話」の授業に参加し、自然な日本語で交流する研修生（看護学部）

研修では、授業参加の合間にヴェネツィアの食文化、美術に関する調査を実施し、研修終了後は各自レポートを提出した。

③ 今後の展望

今回の研修は、ポストコロナ後の世界的な人流再開に伴う観光地の混雑、円安の中で実施することになったため、参加者の負担軽減を考えて他の都市へ移動せず、宿泊先も民泊を活用せざるを得なかったが、このことがかえって、人的交流を深め、非日常の体験につながり、有意義な研修になったと考えられる。

ネイティブスピーカーが日本語の授業に参加することは、イタリア側にとっても充実した経験となり、好評であったことから、今後は短期研修の継続に加え、本学との交換留学についても検討されることになった。

グローバル化に適応できる専門職の育成は課題であるが、このように、自然に人的交流ができる機会への看護学部生の参加を今後も促していきたい。

⑵ 短期・長期留学生への支援

看護学部では、大学の国際交流センター運営委員会で運営している協定校との短期派遣研修への学生参加を支援している。令和５年度は、上記のイタリア　カ・フォスカリ大学への短期派遣研修に１回生１名、２回生１名の計２名の看護学部学生が参加した他、アメリカ　エルムズ大学への短期派遣研修に１回生２名が参加した。教員が引率しない短期語学研修であるイギリス　オックスフォード大学には３回生１名が参加した。

令和５年度に初めて看護学部３回生が９月からエルムズ大学看護学部への約１年間の長期留学を開始している。留学前の英語学習支援、相談支援、申請支援等を行った。また、今年大学の協定校になったベルギー　ゲント大学日本学科への長期留学に３回生が応募し、国際交流センター運営委員会で審査を経て承認され、令和６年９月から開始予定であるため、支援を継続していく。

(3) 異文化理解看護フィールドワーク開講とインドネシアへの短期派遣研修

令和 2 年度から、インドネシアへの短期派遣研修を事前学習・フィールドワーク・事後学習として単位化することとなったが、COVID-19 感染拡大により短期派遣研修は中止となっていた。令和 5 年度は 4 年ぶりにインドネシアへの短期派遣研修について協定校と協議したが、例年派遣していた時期が令和 5 年度はラマダンの時期となること、協定校側から提案された時期が学生の授業・実習時期と重なることから、令和 6 年 8 月に派遣研修を実施することになり、異文化理解看護フィールドワーク受講生 1 回生 3 名は、派遣に向けての準備：インドネシアの医療・生活・言語についての学習とプレゼンテーション、日本・高知を英語で紹介するプレゼンテーション資料作成等を行った。

2) 大学院生への支援

(1) DNGL 修了留学生との交流機会

2022 年 3 月に共同災害看護学専攻博士課程（DNGL）を修了したユディ・アリエスタ・チャンドラ博士が来日し、本学に来校されるにあたり、看護学研究科・国際交流センターの共催で、同氏による講演会を実施した。前期課程学生および教職員 17 名が参加した。

① 概要

日　時：　2023 年 8 月 2 日(水) 10 時 30 分～

場　所：　高知県立大学池キャンパス C310

テーマ：　「高知・日本の経験をどのように学術研究活動に活かしているか」

② 講演内容

チャンドラ博士は、現在母校の国立インドネシア大学看護学部講師として後進を指導する傍ら、精神看護スペシャリスト養成コース事務局長、在日インドネシア元日本留学生協会ジャカルタ地方会長に就任している。日本での経験と DNGL の学位によって、常勤講師に格上げとなる評価がされている。一方で、大学で実習指導者となるためには精神看護実習指導者研修を受けている必要があったが、日本に留学していたために受けることが出来なかったために、帰国後改めて研修を受けたことなど、どのように現在のキャリアに影響を与えているかについて説明された。英語での発表であったが、なつかしい再会に、参加者からも活発な発言があり、質疑応答は盛り上がった。

(2) 国際性を強化する取り組み

看護学研究科では国際化を強化する取り組みとして、下記の 2 つを実施した。

①「アカデミック・ライティングとリーディング」（講師：Dr. Lee, Hyeon Ju）

博士前期課程の学生を対象に、英論文を読み、書くことを目的とした「アカデミック・ライティングとリーディング」（講師：Dr. Lee, Hyeon Ju）を、2023 年 5 月 8 日、15 日、22 日、29 日、6 月 5 日の 90 分／1 回×5 回シリーズで行った。参加者は延べ 55 名、学生の講義の評価は高く、「日本語の文献を読むときも役に立ちそう」等の感想をもらった。

②「ナース・プラクティショナー制度の将来ビジョン」（講師：所和香子）

日本では今、ナース・プラクティショナー（NP）制度創設に向け、日本看護系大学協議会、日本 NP 教育大学院協議会、日本看護協会の 3 団体が協働して取り組み、2022 年 11 月にも日本看護協会より規制改革推進会議医療・介護・感染症対策ワーキング・グループに要望書が提出された。この講義は、学生が海外の NP の実際の活動内容を知り、今の日本の NP 制度創設に向けた課題などについて具体的に検討していく能力を育成することを目的とし、カナダで NP として働く所氏を講師とし、博士前期課程の学生を対象として 2023 年 10 月 11 日に実施した。博士前期課程の学生 7 名が参加し、カナダと日本の看護職の捉えられ方の違いや、医療制度などの違いなどを知ったうえで、カナダでの NP の活動を考える機会となった。